# 総　括

吉岡康暢

## はじめに

食器にみる列島中世の地域性については，1970年末以降，日本中世土器研究会が中心となって在地の食膳・煮炊・調理・貯蔵器の組織的な調査を継続し，西日本の様相がかなり鮮明になってきた。また，中世前期に椀形食膳器と土製煮炊器が欠落する東日本では，やや後発ながら80年代後半から，東国土器研究会・北陸中世土器研究会などにより在地土器の地域色に着目した研究がすすめられた。それは，具体的には食器の地域性＝地域「型」の設定を普遍化する手順で進展し[1]，「型」に映し出された地域の面的拡がりを生産・流通史にかかわらせて論じる視点が主流であった。

ここでは，先行業績をふまえ，西日本の「土器椀」を指標に地域論としての明確な問題意識をもち，中世食器の地域性の理論化と実証を深めた森隆の一連の意欲的な論考から，今日的な課題と克服の方向性を探ってみたい。森は，土器椀に表徴される時空間を表現する概念として，数国ないし数郡ていどの土器生産技術＝「型式」を共有する地域「型」を示準とし，それを超える数ヵ国以上の大地域を「系」，1国ないし郡以下の小地域を「群」とし，系－型－群の序列的分類基準を設けている[2]。そこで構想される「地域」とは，地勢をベースとし，特定の技術と生業活動を紐帯とする地縁社会であり，現実には「型」の細別が至難な「群」は理念的に生産工人集団の最少単位となる。森はさらに，技術社会史の視点から，伝統と革新の競合と融合が古代と異なる中世的な地域形成の特質であり，中世は基本的に「開かれた技術大系」の時代であった[3]として，西日本の瓦器椀を畿内系と九州系に大別し，前者は「楠葉型」→内圏（大和・和泉型）→外圏（紀伊・伊賀・近江・丹波型）へ，後者は内圏（筑紫型＝大宰府）→外圏（豊前・肥後・天草・肥前南部型）への求心構造の技術伝播をモデルとして提示している。また，「型」の分布領域と史的環境から中地域に生産構造較差を付与するため，①狭域特殊型（楠葉型：広域点的領域，黒色土器B類＝準官窯の系譜，特定権門・官衙に奉仕，都市近郊型，高級磁器型特産品），②中間特殊型（大和型：一国と周縁領域，寺院工房，製品の保守・斉一性），③広域等質型（和泉・筑紫型瓦器，吉備型土師器，播磨型須恵器：複数国領域，系の中核，民需品主体製品の均質性），④縁辺在地型（その他の狭域型：一国以下ないし一郡領域，在来色顕著）の諸類型を設定している。

森の作業は，個別報告を地域論として体系化しようとする点で高く評価できるが，椀と坏・小皿とのセット構成，厨房具（〝ケ〟の食器）という性格上もっとも在地色が濃厚な煮炊具の地域性との相関は，課題としてもち越されている。また，土器椀は中世前期で消滅するので，中世後期の地域性と前期との異同の解明には，やはり土製食膳具（椀・皿）と煮炊具（鍋・釜）の組み合わせの把握が要請される。この点は東日本でも同様であって，中世前・後期の土師器坏・小皿と後期の内

耳土鍋・釜が定量比を含め統一的な指標となる。そのばあい，森は生産・流通体制を重視するが，食器の地域性は社会集団の飲食行為＝食習俗の所産であり，饗応・信仰などを含む消費の場での食器の使い分けや廃棄のあり方の視点も同等の比重でとりこんでゆく姿勢が必要であろう。

また，こうした在地土器を介する地域性の追跡が中・小の地域区分にとどまらず，その集合体としての大地域区分の基礎となることは確かであるが，中世の民族問題とかかわる北方・南島と列島中央，あるいは東と西，日本海域・太平洋域といった列島の地域史を規定する大地域性が，広域流通陶磁（舶載陶磁・国産陶器および土器の一部）の分布に端的に表現されていることはいうまでもない。このことは，中世の食器が都市型組成に示現される高度の産地・器種別複合として現れ，通常在地食膳・煮炊器（調理器）＋移入調理・貯蔵器の基本構成をとることに明示されており，大流通と中・小流通の相互関係を基軸に展開する中世日本の分業構造の当然の帰結といえる。ただし，在地土器に表徴される地域性と広域流通陶磁に示された地域性は，領域の広狭のみならず生産・流通機構が同一といいきれないだけに，補完関係を前提としつつも単一の地域社会に短絡化できるかどうかを吟味しなければならない。

さらに，食器を素材とする地域性の終着点として，地域を構成する都市・館・寺社・村落・墳墓等遺跡群間の落差を，土器・陶磁器組成から読みとる遺構論と一体的な遺物論の展開が，歴史的な地域社会像の創出に要望されることになろう。そこでは，都市の食器と村落の食器，ひいては中世の身分と階層を表現するステータス器種の抽出や，〝ハレ〟と〝ケ〟の食器といった食器の社会的機能の考察が不可避の作業となってくる。中世の土器食膳・煮炊器の日常性と非日常性については見解が分かれており，地域性の評価とも緊密にかかわってくる。この点については，「研究活動の記録と課題」でふれたように，近年ようやく食器の定性・定量分析データの蓄積とともに，各種遺構でみられる廃棄パターンや使用（修覆・転用）痕の観察に留意され，文献史料の活用も図られるようになった[(4)]が，確定までにはなお紆余曲折の議論を要しよう。

以下，列島を10地方に大別して中世食器の地域性を要約し，つぎに機能論に一定の展望を試みつつ，列島中世の地域性をめぐる若干の問題を述べて責をふさぎたい。

### （1）北海道

北海道の食器による地域区分は，一般に擦文土器の地域色により道南西，道央，道東北に大別されているが，オホーツク式土器の存在を加味して，道東北部は東部と北部の流氷地帯に区分されよう。擦文アイヌ時代[(5)]の食器は，基本的に食膳具＝土師製坏・椀・有台椀，煮炊具＝土師製甕（大・小），用途と普及が限定された可能性のある貯蔵具＝須恵器瓶・甕（10～11世紀）の組成である。中世アイヌ時代の食器組成は，村落遺跡の調査例が皆無に近い現況で確定できないが，擦文土器の後半に土製食膳具が減少し，東北に連動して列島中央の中世前期のある時期に消滅して，食膳具が漆器，煮炊具が鉄鍋に置換されたという見通しをもっている。したがって，列島中央で盛用された中国陶磁，土・陶製擂鉢および壺甕類が使用された形跡は認められず，無土器地帯として近世アイヌ時代へ推移していったことになる。ただし，とくに中世後半に和人の道南西部への侵植が顕現化すると，和人が居住する交易拠点では列島中央と同一の食器組成がもちこまれるが，カワラケ不在地域として東北北部とともに固有の地域設定が行われるばあいが多い。

ところで，さきの擦文土器の消滅を指標とする中世アイヌ時代への移行年代については，10世紀

後半～11世紀半ばに漆椀，ついで11世紀後半～12世紀初めの鉄鍋への置換が段階的に進行したとする三浦圭介の見解と，擦文土器の編年軸と湖州鏡（釧路市材木町5遺跡），宋銭（泊村茶津4号洞窟，別海町浜別海遺跡1号竪穴など）の共伴例から12～13世紀とする北海道の研究者の意見が対立し，およそ1世紀ないし1世紀半のずれを生じている。筆者は終焉の下限を12世紀中～後半まで幅をもたせ三浦説を支持するが，なお，道内各地の擦文土器編年が一元的に整理されていない上に，終焉年代の地域差も考慮すると今後の検討をまたねばならない。また，10～11世紀の津軽が，五所川原窯産須恵器貯蔵器の全道的供給に端的に示現される対蝦夷向けの交易物資を含む，農業・牧畜・製鉄・製塩基地として発達を遂げたことは確かであるが，岩木山麓の製鉄遺跡群中に鋳造遺跡が存せず，漆器についても交易専用生産の証跡が確認できていない。津軽の諸産業は12世紀まで存続せず，中世との断絶性の大きさも，古代から中世への移行の理解を困難にしている。

北海道への鉄鍋の移入コースは状況的には日本海ルートが想定されるにもかかわらず，生産流通基地能登半島を含む北陸は無耳鉄鍋A類の分布圏に帰属するようで，内耳鉄鍋C類の出土圏が青森・岩手と関東・甲信越に限られている〔五十川伸矢〕ことも留意すべきであろう。なお，内耳土鍋は鉄鍋の普及と前後し，それを模倣して11世紀後半に出現するようで，道内の擦文後・末期の遺跡からも散発的に出土するが，内耳に作る「樹皮鍋」（桜樺皮製）がアイヌの「ニートッシュ」をはじめ北方諸民族にある〔馬場脩〕ことは，始用年代や普及率，機能性の問題があるが，煮炊の補助具として注意する必要がある。

また，11世紀代の東北北部～道南部に少数ながら固有の器種として使途不明とされてきた「把手付土器」は，8～10世紀の史料に散見する「佐志奈閇」（『大日本古文書』15-376），「刺名倍」（『万葉集』3824），「銚子」（『和名抄』）の土製模倣品とみられ，多賀城・秋田城から鉄製品が出土している。この型式の鉄鍋は福島県武井地区向田A鋳造遺跡（9世紀前半以降）で鋳型が確認されており，酒器とするには注口として作出されておらず，体部の形態からも把手付の小形鉄鍋と考えられる。当該型式の鉄鍋鋳型は向田A遺跡で少数しか出土しておらず，8～10世紀代の官衙・寺院等への供給品が，10世紀後半から11世紀代には民需品化し，11世紀後半以降内耳鉄鍋と交代してゆく状況の反映と理解できよう。

なお，アイヌが中世以降陶磁器を日常食器としてまったく使用しなかったかどうかも検討課題であるが，中世後期の中国陶磁・瀬戸美濃陶器（食膳具），国産陶器（調理・貯蔵具）の分布は，①13世紀末～14世紀前半（余市町大川遺跡など），②14世紀後半～15世紀中葉（函館市志海苔館など），③15世紀末～16世紀末（上ノ国町勝山館など）の3段階を経て，道南西部の点的拡散からいわゆる道南十二館を中心とする「館」と膝下の港湾「町」での集中的使用へ発展し，勝山館へ収束する。この分布圏はアイヌと和人の共存地域で若干しか出土しない遺跡にアイヌ村落の可能性を残すものの，日常食器としての流通は考えられず，『新羅之記録』をはじめとする松前藩の記録にみえる余市－鵡川を和人居住区とする記載と正確に一致するので，定量ないし多量出土する遺跡は和人遺跡とできる。道南部は，このようにアイヌと和人居住区の共存ないし錯在状況から生まれた異質の食器組成が拠点的に混合する道央・道東北部と対照的な地域を形成している。

さて，北海道の地域区分でいまひとつの課題は，かって藤本強が「ボカシ」地帯として提起し，近年の北方史研究の進展のなかでしばしば強調される，いわゆる北緯40度線（米代川－馬淵川）以

北の東北北部と道南部を「北日本」という一体的な地域圏として包括的に捉える構想の評価である。この領域の道内での北限の指標はかならずしも明確でないが，続縄文文化の南下をうけた擦文土器圏の拡張が，いわゆる北海道式古墳，保塞村落などとともに共通項とされている。しかし，三浦が説くように，この地域の一体化現像が顕現するのは擦文編年後半の10世紀後半～11世紀代であり，津軽産須恵器の道内一円流布と表裏の関係にある。

しかも，擦文ないし模倣土器は津軽地方を中心とする60ヵ所を超える遺跡では甕類に限られ，すべて客体的な存在である〔三浦圭介〕。もちろん背後にある生活財の交易レベルでの活発な交流を過少評価できないが，中世のとくに後半に生起する片務的交易に連続するものでなく，天野哲也の「特殊な生産物を求めて道内各地から擦文人がやってきた痕跡」という指摘が妥当であり，東北北部を擦文土器圏に含めるのは適当でないと思う。津軽海峡は9世紀以降，異人種・民族の境界としての側面が濃厚で，そのことは，都市の不在，貨幣経済の未発達，水稲栽培をはじめとする木工轆轤，鉄製錬などの生産技術や乗馬の習俗，文字文化，仏教イデオロギー（火葬）が定着せず，擦文文化をうけ中世にアイヌ固有の民族文化の形成が一段とすすんだとみられることで明らかであろう。このようにみてくると，中世北海道の地域区分はとりあえず後半に和人居住区を含む道南西部と，ほぼアイヌ単一地域として推移した道央・道東北部に大別できよう。

### （2）東　北

東北は，通常奥羽山脈を横断する北部・中部・南部に区分されてきた。しかし，遠隔地交易物への依存度が民需品レベルで飛躍的に高まった中世では，中世Ⅱ期に日本海域と太平洋域に陶製調理・貯蔵器の特産地が形成され，海運を介する流通ネットワークが主，奥羽山脈の峠道を介する陸路は従となったので，主として国産陶器の生産技術系列を指標に，西部日本海域と東部太平洋域に大別するのが適当で，さらに土師器の出土量比と在地窯のあり方によって，北部（北奥・出羽北辺）と南部に区分できよう。前項でふれたように，道南部と東北北部を固有の政治・生活領域として包括する立場からすると，古代後Ⅲ期にみられた津軽が生産基地の地位を喪失した反面，青森県十三湊遺跡に代表される北辺の対蝦夷流通基地が顕現する点で独自の地域を設定できなくはないが，ここでは中世アイヌと和人の共存を前提とする「北日本」の過大評価を避け，東北のなかで相対化させておきたい。

当地方の食器は，食膳具＝漆器＋土師器＋舶載陶磁＋国産陶器（瀬戸美濃，後期），煮炊具＝内耳鉄鍋（後期に南部の一部で内耳土鍋），調理・貯蔵具＝国産陶器＋在地土師・瓦製調理器として概括できる。その特色は，①椀形土製食膳具の欠落，②Ⅱ期の京都系土師器Ⅲ T 種（手捏ねカワラケ）の一円的な波及と拠点的な大量消費，在来の土師器R種（轆轤カワラケ）坏・小皿のそれへの同化（器種・器形・法量の互換性），中世後半のR種（轆轤製カワラケ）への回帰と減少，③前半の土製煮沸具の不使用（内耳鉄鍋の普及），④移入陶製調理・貯蔵具の比重の大きさ，という点で東国全体に共通する。なかでも，①京都系土師器の消長が北部平泉の求心性と表裏をなし，中世後半には北部で不毛，南部で希薄地帯化，②平泉への中国陶磁の集中（前半）と城館主層の大量備蓄（後半），③在地煮炊器の未発達と移入煮炊器の圏外という点で，関東・甲信，北陸と一線が画される。④調理・貯蔵具は，西部は珠洲および珠洲系（須恵器），越前（瓷器），東部は渥美・常滑（瓷器）および在地須恵器・瓷器折衷系で占められ，かつ在地陶器，瓦器（後期の擂鉢）が一定の量比

を占める点で関東・甲信と異なる。

**食 膳 具**

平泉政権解体後の土師器の推移は，東・西部とも大差なく，中世Ⅲ期に激減し，北部では13世紀半ばごろ消滅する。T種は陸奥南部の一部（田村地域）のようにⅣ期前半まで遺存するところもあるが，ほぼⅢ期のうちに大形品は坏化し，R種へ回帰する。ただし，Ⅲ期には南部のほぼ全域で鎌倉タイプのR種坏・皿が認められるのは，注意を要する。Ⅳ期の南部は遺跡による偏差があるが，総じて関東に準ずる地域として定着するのは，Ⅱ期の京都系カワラケの西進に匹敵する。東都鎌倉のほぼ東国全域をとりこんだ強力な自立的かつ求心的な政治・文化的動向として評価すべきであろう。本期の事例として，北部の青森県尻八館で1点，岩手県笹間館で15,000m$^2$の調査区で10数片があげられるが，南部ではⅣ期を中心とする福島県の一連の城館をみると，食器総量のなかで相当量土師器を消費する遺跡（南古館53%，荒川館33%）と僅少な遺跡（北古館3%，長沼城11%）が錯在し，近接した北古館と南古館などの量差の説明は難しい〔西山真理子〕。なお，土師器は前・後半を通して一般村落でも若干数ながら普遍的に出土することが知られている。土師器は，V期にはR種の法量分化がすすみ，近世I期にかけて大半は灯明用あるいは儀式用の重ね皿として定量消費されている（福島県梁川城三の丸跡，若松城三の丸跡など）。

つぎに，中世後半では中国磁器と瀬戸美濃陶器のあり方が問題となる。後期の瀬戸美濃には，平椀・天目椀・小皿のほか卸皿・折縁深皿・擂鉢＝調理器，香炉・花瓶＝宗教器など多器種を含むため平準的データがえにくいが，道南から東北北部におけるV期の拠点的城館（上ノ国町勝山館，青森県浪岡城，同根城）では，中国陶磁2.5～4.4対瀬戸美濃陶器1ほどで中国陶磁が卓越し，Ⅳ・V期前半の太平洋域中部（岩手県大瀬川館・同柳田館・同境関館）でも1.8～2.9対1で中国陶磁の優勢は変わらない。ところが，東部南辺のⅣ・V期を中心とする城館では，中国陶磁が卓越した遺跡（福島県元屋敷遺跡）もあるが，ほぼ拮抗するもの（北古館・長沼城・荒川館，中国陶磁1.7～1.1対瀬戸美濃陶器1）と瀬戸美濃陶器優勢の遺跡（南古館・久世原館，中国陶磁1対瀬戸美濃陶器1.6～3.9）があり，土師器と中国陶磁の量比はかならずしも相関しないものの，相対的ながら太平洋南部における瀬戸美濃陶器の供給量は関東に近い状況が看取されよう。

**煮 炊 具**

陸奥南部で関東・甲信，東海同様，主として瓦製の上野型に類する内耳土鍋が使用されたことが知られているが，その分布圏は中通り（福島・郡山）と隣接する田村地域および出羽の米沢盆地にかかるゾーンに限られることから，伊達氏の支配領域との関連が考えられ，近世I期まで存続するという〔飯村均・第1部2項〕。福島地域では瓦製擂鉢も目立つようで，擂鉢の生産地は東北の各地に存在が見込まれ，根城では約20%が在地産擂鉢と推定される（筆者算定）。

**調理・貯蔵具**

東部は，中世Ⅱ期の在地須恵器系陶器は少量の狭域供給にとどまっていたが，Ⅲ期には陸中の一連の瓷器系陶器（宮城県伊豆沼・三木・白石窯）と会津大戸陶器の流通圏が形成され，磐城南部にも小地域ごとに稼動していることが判明してきた。その供給圏は，水系，盆地などさまざまの小地域を舞台としており，史的背後事情の解明が必要である。在地陶器の消費量は，生産地付近および中核港湾から離れた周辺では常滑製品と拮抗あるいは凌駕するとみられる。これらの在地窯も14世紀後半には廃窯し，常滑窯単一の供給圏とし

て推移する。一方，西部はⅡ期に米代川を北限とする狭域供給圏が連鎖した点は東部と同じだが，中世Ⅲ・Ⅳ期には珠洲系窯は停廃して珠洲製品単一の流通圏となり，Ⅴ期に越前製品がこれを継承し，北海道から北東日本海域一円に供給圏を確立し，Ⅲ期のあり方と対照的である。

**（3）関東・甲信**

関東・甲信は，東海道ルートの関東南部と東山道ルートの関東北部および甲信に大別でき，さらに土師器・内耳土鍋の型式と中世後半の陶製・瓦製調理・貯蔵器の産地別量比を指標に，関東南部は相模・南武蔵と房総，関東北部は上野・北武蔵と東北南部に連係する常陸・下野，甲信は北陸（越後）に通ずる北信濃と関東，東海と結ばれる甲斐・南信濃に区分できよう。当地方の食器は，食膳具＝漆器＋土師器＋舶載陶磁＋瀬戸美濃陶器（後半），煮炊具＝内耳鉄鍋＋内耳土鍋（後半），調理・貯蔵具＝移入国産陶器＋在地瓦質土器の組成である。その特色は，中世前半の土製椀形食膳器，煮炊器の欠落で東北と共通するが，①土師器の全期間全域での定量使用，②鎌倉における各種土器・陶磁器の大量消費，西国産食器の搬入と拡散（Ⅲ期），③中世後半の土製煮炊具の普及（関東南部は希薄），④調理・貯蔵具の東海産陶器への全面依存，⑤関東北部・北信濃を中心とする在地瓦質調理・貯蔵具の狭域供給（Ⅲ期）と概括できる。

**食　膳　具**

中世Ⅰ期の様相が全体に不明瞭であるが，土師器R種の椀・坏・小皿の組成に一部地域（上総など）では黒色土器も残るようである。また，甲斐・中南信のⅠ期には柱状高台皿が盛用される。この器種組成がⅡ期に京都系土師器T種皿を受容して急速に同化がすすみ，地域・遺跡ごとの量比差がみられるものの，T・R両種が併用されるようになるのは東国全体の状況である。ただ，房総では皿形器形への転換がみられないうえにT種が認められず，R種地域として推移する点で特異である。以後の土師器の消長は，鎌倉のそれが13世紀後半にR種に統一されるのをはじめ，東国全域でR種へ回帰するなかで，常陸のようにⅡ期以来T種が卓越し，客体的ながらⅣ期まで残る地域性も存する。Ⅲ期は，R・T種両型式とも鎌倉タイプが関東・甲信の主流を占め，鎌倉の求心力の強さを反映しているが，上野・常陸のように在地色の強い地域がみられるのは，当期の量的拡大再生産と消費膨張が，地域経済・文化の発達によって支えられていたことの証と考えられるから，両国の相対的な自立性として評価できよう。鎌倉での土師器消費量は，13世紀中葉からの100年間で2,160万個と試算されている〔斉木秀雄〕が，大量消費の状況は臨海地（前浜）に集団居住区を開拓した下層町人も土師器を相当量消費しており，中国陶磁の普及度とあわせ，都市的消費志向が直截に反映している。

Ⅳ期は内耳土鍋・擂鉢類の在地生産が高揚し，食器の地域性も一段と複雑な様相を呈するようになる。上野では土師器R種が東西でそれぞれ内湾する皿形と外反する坏形の分布圏が形成され，上総では南武蔵・相模と共通する底の広い皿形と常陸・下野に近い深身の坏形が混用されている。こうした小地域性と3法量ほどに分化する傾向は，Ⅴ期に引きつがれるが，関東・甲信の坏形，厚手のR種が大勢を占めるなかで，相模西辺の小田原城跡では京都系土師器皿の影響下に，薄手で体部丸腰タイプの皿に転換し，T種が定量併用されている。この時期の京都系土師器は，東京都八王子城など北関東まで点的に波及しているが，とくに後北条氏系城館で集中的に使用される状況は認められないようである。こうした土師器皿のあり方は，基本的に近世Ⅰ期へもち越されR種が一般的で，江戸の大名屋敷ではT種が消費されている。

中国陶磁はⅢ期後半～Ⅳ期に出土量が大幅に減少し，一部瀬戸陶器が代替するようになるが，Ⅴ期には他地域同様，城館で中国陶磁が大量に消費されている。中国陶磁と瀬戸美濃陶器の補完関係の推移を知るデータに恵まれないが，Ⅲ～Ⅴ期を通して瀬戸美濃陶器優位地域であり，それが関東・甲信内部で地域性を誘発する要因にはなっていないと思われる。

**煮炊具**

10世紀末ごろまでほぼ国を単位とする長甕・小甕型式が併立し，11世紀代まで粗製，厚手の長甕が各地で少量みられるが，上野では須恵質長釜が目立ち，別型式の土師製長釜は甲斐・信濃でも中世Ⅰ期まで存続した。Ⅱ・Ⅲ期には在地の土器煮炊具は認められないが，鎌倉を核とする相模・東京湾岸域へは南勢鍋，肥前石鍋が搬入され，鎌倉ではいずれも定量消費されている。Ⅳ期は西国に連動して関東・甲信一帯で内耳土鍋が出現し，Ⅴ期まで盛用される。内耳土鍋には土師製（常陸・下野・甲斐・信濃）と瓦製（その他の諸国）があり，関東北部では「常陸・下野型」，「上野・北武蔵型」，甲信では「甲斐・信濃型」の諸型式が設定され，中地域区分の指標となる。これらは14世紀後半のうちに出現したとみられるが，普及は15世紀前半である。ところが，関東北部・甲信に対し下総を除く関東南部は，在地の内耳土鍋が確認される（上総）ものの出土量が少なく，南武蔵へは北武蔵・下総の製品が流入しているようである。しかも，相模・南武蔵・房総では南勢産と推定される土釜も少数併用され，きわだった中地域色をみせている。内耳土鍋には当初から深身の鍋形と浅めの鉢形が存し，Ⅴ期後半には例外なく焙烙鍋に転じ，近世Ⅰ期以降へ続く。

**調理・貯蔵具**

中世Ⅱ期以降，東海・濃飛とともに東海産陶器（渥美・常滑・瀬戸美濃）の一円流通圏として推移し，とくに中世前期はほぼ全面的に依存する大地域を形成した。しかしⅢ期には，関東北部と北信で瓦製甕・壺・擂鉢，木曽川中流域（岐阜県中津川窯）と南比企丘陵（埼玉県大日向（おひなた）窯）に狭域向けの瓷器系陶器窯が稼動し，全体に東北東部より低調ながら在地の土器生産が一定の発達をみせ，多様な小地域性を現出している。そして，常滑窯が貯蔵具主体の集約生産体制に移行するⅣ・Ⅴ期には，瀬戸美濃産食膳・調理具が広範に消費されるとともに，在地窯は貯蔵具生産を停め，関東北部・甲信を中心に瓦質ないし土師質の調理・煮炊具と一部で暖房具（火鉢）・宗教具（香炉・花瓶）・喫茶具（茶釜・風炉）などの生産へ移行した。

このうち，関東北部で点的に出土する常滑と東播製品の折衷的模倣を思わせる瓦製に近い須恵器甕・壺と，大日向窯については実態未詳であるが，東北東部のごとく常滑製品に拮抗する供給量を保持した形跡はない。ただ，利根川を挟む上野南東部～下野南西部と北武蔵に狭域流通した別型式の瓦質土器（壺・擂鉢主体）は，内耳土器と別の地域圏を形成する。また，北・中信はⅢ期に日本海域の珠洲陶器流通圏に組みこまれ，一方南信は常滑製品に代わって東濃の中津川製品が擂鉢を主体に供給され，顕著な小地域性をみせる。加えて佐久平・松本平あたりを南限とする北・中信では，珠洲写しの瓦製擂鉢が併用され，Ⅳ期以後の在地生産の第2段階に連なる地域性を準備している。

### （4）東海・濃飛

東海は，東海道ルートの東海沿海域と東山道ルートの中部高地西半に大別でき，さらに土師器・内耳鍋の型式と煮炊器の定量比，中世前期には瓷器系食膳具（山茶椀Ⅲ）および調理・貯蔵具の産地構成を指標に，東部（東遠江），西部（西遠江・三河・尾張），南部（伊勢），北部（美濃・飛騨）

に区分でき，全体に西国と東国の緩衝地帯ないし東国への入口地帯として位置づけられる。本地方の食器は，食膳具＝漆器＋舶載陶磁＋国産陶器（瓷器系→瀬戸美濃陶器），煮炊具＝内耳？鉄鍋＋土鍋（後期は＋内耳土鍋・釜），調理・貯蔵具＝国産陶器の組成をとる。その特色は，①中世前期の陶製椀皿の多量使用，②土師器皿の相対的な少なさと後期の城館での大量消費，③前期の中国陶磁出土量比の低さと後半の瀬戸美濃陶器の優勢，④主として前期の土製煮炊器（南勢鍋・釜）の中流通，後半の内耳土鍋の地域性，⑤瓷器系陶器（瀬戸・渥美・湖西・常滑・東濃・東遠）の広・狭域向け調理・貯蔵具の単一流通（土師・瓦製品不在）と概括できる。

**食　膳　具**

古代の灰釉陶器主流地帯にあって傍流であった土師器R種椀・坏・小皿と黒色土器椀（伊勢）の系譜が，中世Ⅱ期に京都系土師器の影響下にT種皿形へ転化するのは東国共通の事象であるが，東遠江はR種の量比が高く，以西はすべて中世を通してT種主体で推移する。Ⅱ・Ⅲ期の土師器の消費量は中枢的な寺社（伊勢・熱田神宮など）で大量使用されるのに対し，一般村落では食器総量の２～３％にとどまるようである。この傾向はⅤ期の城館（岐阜城・清洲城など）でも顕著で，再度京都系に同調し80～90％の量比を占め，きわめて遺跡格差の大きい使用状況がうかがえる。また，陶製食膳具は，各生産地で灰釉陶器からの連続的な変化が辿れ，13世紀中葉まで70％を超える遺跡がめずらしくないが，14世紀初葉までに瀬戸と東濃窯以外の窯跡で生産を停止する。両窯の製品，とくに後窯の製品は高台を喪失し，低平・小形化しつつ東海西部に供給圏を確保するものの消費量は激減し，食膳具としての実態を失いつつある状況がうかがえる。Ⅳ・Ⅴ期には，瀬戸美濃灰釉平椀・小皿・天目椀→丸椀・丸皿・天目椀が量産され，前期の陶製椀を代替する供給量は確保されておらず，機能面での連続性を疑問視する意見があるが，品質格差＝価格差から生じる使用頻度の違いを考慮すれば，消費層の問題は残るものの，同一の機能とみてよい。

**煮　炊　具**

中世Ⅰ期までいわゆる清郷タイプの長甕，伊勢では長甕と中世につづく球胴甕があり，後者はⅠ期に南勢鍋として定型化される。Ⅱ期には常滑陶器鍋・釜も若干出土している。南勢鍋は伊勢で多量使用されるとともに，東海各地と鎌倉へ定量移出されたが，美濃・飛騨では関東なみに出土量が僅少で，在地で内耳土鍋も生産されたようであるが，土製煮炊具希薄地域のまま推移する。南勢鍋の供給量はⅢ期後半に急激し，Ⅳ期には東海から関東南部の沿海域に南勢産とみられる土釜が少量出土するようになる。鍋同様口縁に２孔１対の吊り孔が焼成後穿たれた個体が多いことが指摘されている。この段階では瀬戸産灰釉内耳鍋・釜もみられるが，生産量は限られている。Ⅳ期後半～Ⅴ期に普及する内耳土鍋は，「遠江型」「尾張型」が定量使用されたが，消費量は下総を含む関東北部・甲信に及ばない。当期には尾張を中心に大形土釜も少量ながら見出され，茶釜も出土する。Ⅴ期後半に内耳土鍋が焙烙化するのは他地域同様である。調理・貯蔵具に瓦製品がまったく存しないのは，20ヵ所以上にのぼる大小の陶器生産地が稼動した東海の特色であり，陶器の流通圏の流動は食膳具を含め東海内部の小地域性を規定する重要な指標となるので，狭域窯製品の流通圏の解明に期待をつなぎたい。

### （5）北　陸

北陸は，北陸西部（越前・加賀・能登・越中）と東部（越後）に大別でき，さらに土師器の型式と量比，在地陶製・瓦製調理・貯蔵具のあり方を指標に，畿内周辺に接する越前・加賀，富山湾の

一衣帯水地帯をなす能登・越中，北信・関東北部（上野）と出羽に連結する越後に区分できよう。当地方の食器は，食膳具＝漆器＋土師器＋舶載磁器＋瀬戸美濃陶器（後期），煮炊具＝鉄鍋（＋前期に一部土鍋少量），調理・貯蔵具＝国産陶器（後期に一部で瓦製調理器）の組成である。その特色は，①土師器の相当ないし定量使用，②中国陶磁消費量の高さ，③土製煮炊具の欠落，④須恵器系（珠洲）→ 瓷器系（越前）広域窯の東日本海全域への供給と前期の須恵器・瓷器両系狭域窯の稼動と概括できる。食器の枠組みは東国に帰属するが，組成は全体に単一で，①京都系土師器の一円的な二次波及は西国に通じ，②～④は関東・甲信，東海・濃飛と異なり，東北西部に連接する日本海域ゾーンを形成している。

**食 膳 具**

古代までの土師器・黒色土器椀・坏・小皿の組成は，中世Ⅰ期に柱状高台皿，東部で東国系とみられる有台皿や磁器写しの小皿が加わって多器種化するが，Ⅱ期に京都系土師器の本格的な洗礼をうけ，T種が段階的に定着し，地域性が均一化され皿（大小）の組成に転ずる。土師器皿の量比は中世前期の加賀では90%代を示し，以東では西高東低であるが，越中で京都系皿の導入段階のT種はほぼ拠点遺跡に限られるという。Ⅲ期には在地化と地域化がすすみ，T・R両種が併用された越後では，西部，中央，北部で，A頸城，B刈羽・三島，C阿賀北タイプが設定されている。Bは鎌倉タイプに同定でき，北部は出土量の僅少さに加えT種篦切り底タイプで占められるなど，固有の小地域性を保持している。

Ⅳ期は3法量に分化し，小形皿の灯明具としての使用例が急増するとともに，城館と一般村落での消費量の格差が顕現する。また，地域偏差も表面化し，当期の越後は上野型式のR種で斉一化が図られ，その趨勢は越中に及び東部で関東色が濃厚となる。Ⅴ期は越後北辺を含む北陸全域が再度京都系の影響下に入り，西部の城館では福井県一乗谷朝倉氏遺跡に代表される大量消費がみられるが，朝倉氏館で90%以上を占め，越中の城館では灯明皿の使用例が目立つ。T・R両種が併用された越後では，北部で出土量が極端に低いが（岩船郡牧目館で3%），以後近世Ⅰ期へ段階的にR種へ回帰することが知られている。

中国陶磁は，西部の拠点遺跡では11世紀後半から白磁が定量出土し普及率の高さを示し，以後も遺跡の格差を示す指標となるが，Ⅳ期以降，瀬戸美濃陶器の流入後も石川県西川島遺跡（中国陶磁1対瀬戸美濃陶器1.2）のような村落部のデータがあるものの，Ⅳ・Ⅴ期の港湾・城館では，中国陶磁2.5対瀬戸美濃陶器1ていどの比率で中国陶磁卓越地帯として推移しており，東国の太平洋域と対照的である。

**煮 炊 具**

須恵器成形技法で作られた古代の土師器長甕・小甕は，9世紀後半以降段階的に減少し，中世Ⅰ期のうちに消失する。以後Ⅱ・Ⅲ期に加賀で土鍋が若干出土し，珠洲窯で鍋釜が焼成されるとともに，肥前石鍋と畿内系の瓦製鍋釜が，Ⅳ期に越後で内耳土鍋が点的に出土するていどで，在地製品は皆無に近くほぼ完全な鉄鍋地帯であった。

**調理・貯蔵具**

中世Ⅰ期に在地の須恵器や産地未詳の甕が寄せ集めで消費される不安定な状況から，東日本海全域がⅡ～Ⅳ期に珠洲，Ⅴ期後半から越前のほぼ単一の流通圏となり，東太平洋域とともに東国的な調理・貯蔵具のあり方を示す。在地の狭域窯は，南加賀でⅢ期の陶器組成の過半を占めた以外は，越中（八尾窯）・越後（北越窯）の須恵器・瓷器系窯とも量比は僅少で，Ⅳ・Ⅴ期に越中以東でみられる瓦製擂鉢の供給も，珠洲・越前陶器の一部

補完にとどまった。

### （6）畿内周辺

畿内と周辺は，土製食膳具，煮炊具を指標に東北部と南西部に大別され，さらに東北部は東部（山城・近江）と北部（若狭？・丹波・丹後），南西部は西部（和泉・河内・摂津）と南部（大和・伊賀・紀伊）に区分できよう。ただ，土師器皿に具象される京都の求心性と，瓦器椀，釜鍋の流通を介する地域間の相互交流によって食器圏が複合し，複雑な地域相をみせている。当地方の食器は，食膳具＝漆器＋瓦器（一部黒色土器）・土師器＋舶載陶磁（後期は＋瀬戸美濃陶器），煮炊具＝鉄鍋＋土釜・鍋，調理・貯蔵具＝国産陶器＋瓦器（後期）の組成である。その特色は，①古代後Ⅲ期以来の京都系土師器圏の形成，②京都を除く瓦器椀の盛用と地域型の競立，③釜主体の土製煮炊器の定量消費と地域型の併存，④移入陶製調理・貯蔵具の供給と在地瓦器の発達と概括できる。

**食　膳　具**

古代の土師器・黒色土器椀・坏・小皿の組成が，中世Ⅰ期に大局的に瓦器椀（小皿）＋土師器皿へ転化し，基本セットを構成する。また須恵器の生産地は，播磨西部（相生窯ほか），備後（沼隈窯）などにも存したが，12世紀前半代のうちに淘汰され，東播（三木・神出→魚住窯）と備前，備中（亀山窯）が特産地化した。瓦器椀は，河内（楠葉）・大和・和泉で先発し，それぞれの影響下に丹波と紀伊・伊賀・近江（蒲生郡）で独自の型式を成立させている。周縁の近江（野洲郡）と丹波・丹後では黒色土器で代替したが，本地方のほぼ全域が瓦器椀圏を形成するなかで，京都のみ使用量が著しく低い。楠葉型と和泉型はそれぞれⅠ・Ⅱ期前半とⅡ・Ⅲ期前半を中心に畿内でも国域を越え，さらに瀬戸内へ拠点的，四国へ面的に供給され，西日本における中世的食器の指標となる瓦器椀，土師器椀の成立を主導した。13世紀後半代に急速に小形・粗質化して多くは皿形の器形に転じ，14世紀半ばごろ一斉に消滅する。

土師器皿は京都系を軸に展開し，14世紀半ばで平安様式系列は止揚され，13世紀に出現した別系列（産地）の坏形白色土器と交代し，15世紀初めには3，4法量に分化して皿形となり，近世Ⅰ期以降も存続する。京都系土師器は，古代後Ⅲ期から中世Ⅰ期のうちに畿内から周辺国へ拡大し，12世紀中葉と15世紀末葉に再度列島規模で波及するが，Ⅱ期の直接的な影響が西は播磨，東は東国一円をとりこんで進展したのに対し，Ⅴ期は九州を除く西国のほぼ全域に及び，東は日本海域で越後，太平洋域では相模西辺にとどまった。畿内周辺でも近江は京都系の忠実な模作で終始し，大和と中世Ⅲ期までR種が残った紀伊は，Ⅰ・Ⅱ期には京都系を模倣しながらⅢ・Ⅳ期に一時的に在地色を強めており，河内・和泉は在地独自の型式が主体をなした地域である。また，伊賀では中世Ⅰ期まで，西摂では前期にはR種坏皿，西近江でもR種皿が併用された。こうした趨勢も，瓦器椀が消滅する後期には京都系皿の範型におさまる斉一化が進行し，地域色は喪失の方向を辿った。

舶載陶磁は，都市部を除けば1～3％ていどの出土量にとどまる。中世後期には，瀬戸美濃椀皿類も少量ながら広範に供給され，舶載陶磁と拮抗する遺跡もあるが，とくにⅤ期の城館・寺院や都市部では，舶載陶磁5～8対瀬戸美濃陶器1ていどで，舶載陶磁が卓越しているようである。

**煮　炊　具**

古代の球胴甕と摂津・河内・和泉・大和などで固有の型式が辿れる球胴釜が，ほぼ中世Ⅰ期のうちに定型化するとともに，周辺諸国での派生型式を誘発して展開し，両者が併用された京都・近江以外の諸国での土釜主流の煮炊具組成が本地方の大きな特色である。大和では土鍋もみられるが大和型土釜の伝統を墨守し，河内・和泉は土釜の

みを使用したが，鍔の位置が胴部最大径より上部にあり鍋と機能上の差異は認めにくい。種々の属性を具備した土釜の型式・系譜が比較的明瞭なのに対し，土鍋の型式設定は容易でないが，山城型と共通の特徴をもつ受口口縁タイプのバリエーションが畿内北部から日本海側に広く認められる。

なお，西摂は本地方に含めてあるが，前期は播磨系，後期は河内・和泉系鍋を使用している。土釜・鍋の出土量も地域によって一様でなく，河内・和泉と大和でもっとも多量に消費されたようで，他の諸国では土釜・鍋とも定量存するが，京都での比率は低く，丹波・丹後で少ないのは日本海域通有の事象のようである。土釜・鍋とも瓦器椀ほどでないが国域を越えて供給されており，Ⅴ期の大和型釜が京阪を中心に摂河泉まで流通するのは顕著な事例である。全体にⅣないしⅤ期に型式が交代ないし更新され，16世紀後半には出土量が急減し，鍋形から焙烙形へ転じて近世を迎えている。

**調理・貯蔵具**

前期は東播甕・壺・擂鉢が主流を占めるが，京都と瀬戸内沿海で十瓶山製品も少量見出される。中世Ⅱ期以降，東部（京都・山城・近江）を中心に常滑甕が流入し，Ⅲ期には常滑貯蔵器＋東播（魚住）調理器が西国の基本セットとなる。北近江・丹後へは越前陶器も移入されている。後期には東・北部が搬入陶器への依存度が高かったのと対照的に，西・南部で瓦製調理・貯蔵具，大和で暖房・喫茶・宗教・灯明具も生産された。河内・和泉では，13世紀後半に土釜とともに東播写しの瓦器甕が出現し，14世紀末ごろから擂鉢も量産され16世紀にかけて独自の小地域圏をなし，甕は近世の湊焼に引きつがれてゆく。大和では瓦器椀消滅後，多様な瓦器を生産し，大和火鉢が列島規模で流通したことはよく知られている。紀伊にも在地の瓦器擂鉢が存在するようである。

後期の西国に一円流通する備前甕・壺・擂鉢は，京都や紀伊で定量出土し重点的な供給状況をうかがわせるが，全般に15世紀にやや目立ち，16世紀には大量流通し，瓦器生産地域では重層的な消費形態をとったと考えられる。16世紀には西部で丹波，東部で信楽甕・壺・擂鉢が瓦製調理・貯蔵具を駆逐してゆく。

### （7）山　陽

土・陶製食膳・煮炊具の型式と在地の陶製・瓦製調理・貯蔵具のあり方を指標に，東部（播磨・東備前・美作）と中・西部に（西備前以西）に大別され，東部はさらに東播磨と北・西播磨，中・西部は中部（西備前・備中・備後），西部（安芸と周防・長門）に区分できよう。当地方の食器は，食膳具＝漆器＋須恵器＋土師器＋瓦器（移入，一部）＋舶載陶磁，煮炊具＝鉄鍋＋土鍋・釜，調理・貯蔵具＝国産陶器＋瓦器（後期）の組成である。その特色は，①中・西部は中世前期の京都系土師器の圏外，②紐轆轤成形技法による須恵器・土師器椀の地域型の連鎖，③畿内と対照的に土師・瓦製土鍋の多用と地域型の発達，④東部で陶製調理・貯蔵具専用地域の顕在と中・西部で瓦製調理器の盛行と概括できる。

**食　膳　具**

古代の須恵器・土師器・黒色土器椀・坏・小皿の組成が，中世Ⅰ期に単純化しつつ定型化され，東部で播磨（東播）・備前・美作（勝間田）型の須恵器椀・小皿，中部で畿内瓦器椀に触発された吉備型土師器椀と坏・小皿（ヘラ切底），西部で在来の伝統を保持しつつ改組した防長型土師器椀（無高台）・坏・小皿（ヘラ切底）へ移行する。畿内周辺との差異は，瓦器と須恵器・土師器という器質差にとどまらず，轆轤成形技法をベースに椀・坏・小皿の器種組成を保持する在地性の濃厚な食器圏を形成した。椀形食膳具の終末は，東部

の須恵器がほぼⅡ期，中・西部では安芸がもっとも早いようで，防長も13世紀代のうちに消滅し，吉備型のみ14世紀代まで存続する。

中世後期は，上記の土師器セットが3，4法量の皿形に統一され，京都系土師器の挙動に基本的に連動するが，東部が前半に引きつづきほぼ忠実な模作に終始したのに対し，中・西部はR・T両種が併用されたが，16世紀後半の防長をはじめとする城館では真正の京都系がみられる。舶載陶磁の量比は畿内に準じ，草戸千軒遺跡でも1～2％ていどにとどまる。瀬戸美濃陶器は，前期には瓶子・卸皿，後期に天目椀・小皿・折縁盤・仏器などが点在するにすぎない。

**煮　炊　具**

食膳具の地域性に対応し，古代の球胴甕をベースに各地域で独自の土鍋型式が創出された。たとえば播磨では，中世Ⅲ期に叩き成形の鍋・釜が定型化され，Ⅴ期に器形を更新し，後半には近隣の諸国へ移出された。一部山城系の土釜も併用されたが，叩き成形に須恵器卓越地域の特色がみられ，Ⅱ期には須恵器生産地の小形閉塞窯で土師器釜が専焼されている（明石市魚住40号窯など）。中部は瓦製・土師製のくの字・受け口縁鍋（一部足鍋，安芸型土釜）が使用され，Ⅴ期には，亀山産の瓦製くの字口縁鍋に交代し，内耳鍋・把手付鍋・茶釜などが広汎に消費され，近世Ⅰ期まで少量出土する。西部のうち安芸は特異で在地産土釜で推移し，防長はⅡ期から近世Ⅰ期まで瓦製足鍋を主体としくの字口縁鍋と併用され，後期には体部叩き成形を採用し，Ⅴ期には瓦製擂鉢とともに筑前・豊前から肥前東部の沿海部に流通している。ここでも16世紀には内耳鍋を含む複数型式の土製煮炊具や茶釜など多器種が生産された。

**調理・貯蔵具**

中世Ⅱ期は東播擂鉢が目立つが，備前東部以外でも常滑・備前甕が定量消費され，中部（福山市草戸千軒遺跡）はⅢ期には常滑・備前・亀山貯蔵器がほぼ等量で，東播（魚住）・備前調理器とセットをなして供給されている。美作と伯耆・因幡は中国山地を越えて勝間田製品の流通圏となったが，Ⅲ期には自給的生産に転じ，Ⅳ期以降在地瓦製品へ移行するようである。後期には備前陶器が段階的に普及するが，中部の調理器は亀山などの在地製品が優勢で，Ⅴ期には備前甕＋亀山擂鉢が主体となる。美作・防長でもⅢ～Ⅴ期に擂鉢をはじめとする瓦製品が常に定量を占め，西国に共通する広域用陶器と狭域用瓦製品の共存がみられた。

### （8）四　国

四国は，畿内との交渉を基調とする一方で，山陽とも緊密に結びついているため，四国それぞれの地域性が認められるが，移入食膳器と在地食膳・煮炊器のあり方を指標に，独自色の強い讃岐と畿内西部・山陽中部に連係する阿波・伊予とこれに準ずる土佐に区分できよう。讃岐には古代須恵器窯が発展した十瓶山窯が稼動して中世前期の広域窯の一翼を担い，土師器・黒色土器・瓦器とともに多彩な食膳具で構成されたのに対し，他の三国，とくに阿波・伊予は在地の土製食膳・煮炊具が発達したとはいえ，椀形食膳具は移入品への依存が高い点で共通する。本地方の食器は，食膳具＝漆器＋土師器・瓦器・黒色土器＋舶載陶磁，煮炊具＝鉄鍋＋土鍋・釜，調理・貯蔵具＝国産陶器＋瓦器（後期）の組成である。その特色は，①大勢的に京都系土師器の圏外，②定量移入された畿内産瓦器椀（楠葉型少量，和泉型主）および山陽産土師器椀（吉備型）＋在地土師器坏・小皿が基本組成，③くの字口縁土鍋の地域型の発達（足釜，一部で土釜併用），④移入陶製調理・貯蔵具を補完する在地土器の弱体と須恵器特産地（讃岐・十瓶山窯）の存在と概括できる。

**食 膳 具**

古代後Ⅲ期の須恵器・土師器・黒色土器椀・坏・小皿の組成が，中世Ⅰ期に単純化し各国で顕著な地域差をみせずに定型化される。しかし，12世紀後半を画期とする和泉型瓦器椀，ついで吉備型土師器椀の流入が加わって，在地製品は大幅に減少する。ただ，須恵器特産地を擁する讃岐では，その系譜を引く瓦器椀（西村タイプ）が普及し，13世紀にかけて在地の土師器・黒色土器椀と和泉型瓦器椀が競用される複雑な様相を呈した。なお阿波東部では，十瓶山系須恵器と在地瓦器椀の存在が知られている。

上記の在地食膳具は，14世紀以降，中部土佐のごとく土師器皿T種が伝播する小地域を内包するが，ほぼ轆轤成形品で中世Ⅰ期に生起した土師器の底部切り離し技法の変化は，糸切り→篦切り→糸切り＋篦切り（讃岐，中讃は篦切りのみ），糸切りのまま（阿波），糸切り＋篦切り→糸切り（伊予），篦切り→糸切り（土佐）の地域性が認められる。中世後期の土師器は皿形主体に転換するが，阿波および16世紀前半に京都系土師器皿が多用された土佐では，深身の坏（大小）が併用されるなど，在地色の強い器種が作られた。

**煮 炊 具**

古代の球胴甕や摂津型釜は，中世Ⅱ期にはくの字口縁土鍋主体示向で統合され，後期には多様な地域的展開を遂げる。Ⅱ～Ⅴ期にかけて量比差があるものの足釜が定量消費され（阿波はⅢ期のみ），和泉型釜も瓦器椀に随伴して各国へ流入している。阿波ではⅢ・Ⅳ期に京都系土釜がみられ，Ⅳ・Ⅴ期には体部叩き成形による固有型式の土鍋・釜が流布し，讃岐・土佐でも独自の土鍋型式へ発展している。

**調理・貯蔵具**

十瓶山産の甕・壺・擂鉢は，四国でも讃岐以外は出土量が少ないようで，京都と大宰府を結ぶ畿内・瀬戸内での点的な出土にとどまっている。本地方の調理・貯蔵具は，大局的に西国に共通し，中世Ⅱ期を画期とする東播甕・擂鉢から，Ⅲ期の常滑甕＋東播擂鉢セットへ移行し，これに亀山・備前が加わる組成であるが，段階的な量比の変化は明瞭でない。後期は，備前が15世紀以降目立つようになり，16世紀には調理・貯蔵具の主体を占める。一方，讃岐ではⅣ期に土師・瓦質折衷の甕・擂鉢・鍋・足釜を共焼した在地窯（綾歌郡国分寺町楠井窯）が稼動し，阿波でも東播や備前写しの瓦製擂鉢が存するが，全般に山陽ほど在地製品の比重は大きくなかったようである。中国陶磁の量比は畿内・山陽に準じ，後期の瀬戸美濃陶器も散発的である。

### （9）山 陰

山陰は，土製食膳・煮炊具と移入陶器および在地瓦器調理・貯蔵器を指標に，東部（因幡・伯耆）と西部（出雲・石見）に大別できる。本地方の食器は，食膳具＝漆器＋土師器＋舶載陶磁（後期は＋瀬戸美濃陶器），煮炊具＝鉄鍋＋土鍋・釜，調理・貯蔵具＝国産陶器・瓦器の組成である。その特色は，①京都系土師器の一定の影響，②柱状高台皿の多用と土師器無高台椀・小皿セットでの推移，③土製煮炊具（土師器土鍋主体）消費量の低さ，④東海・山陽産調理・貯蔵器の移入と在地須恵器・瓦器の併用と概括できる。

**食 膳 具**

古代の土師器・須恵器椀・坏・小皿は中世Ⅰ期に土師器のみに淘汰されるが，組成は新たな柱状高台を加え遺存する。Ⅱ期には在来の土師器R種に京都系土師器T種が定量伴い，それに誘発され椀（坏）＋小皿の組成が成立する。京都系土師器の受容，無高台椀と柱状高台皿の多用は，日本海域に通ずる要素といえる。土師器はⅣ期に皿型

化するが，Ｖ期には京都系土師器が二次的に波及し，在地のＲ種皿との量比は遺跡によるばらつきがみられるものの，相当量を占めている。瓦器椀は和泉型が点在するていどである。

舶載陶磁は平均的に山陽・四国と大差ないようであるが，瀬戸美濃陶器は相対的に出土量が多い。

**煮　炊　具**

古代から中世への転換相が不分明であるが，中世Ⅱ期には定型化を完了するようで，伯因と石雲では様相が異なる。伯因では畿内系の受口口縁土鍋，山城系瓦製土釜と在地独自のくの字口縁土鍋が併用され，畿内系の２器種が後半までつづく。対する石雲は，くの字口縁土鍋を主，受口口縁土鍋を従とし，後期には前者が在地色の強い型式へ発展するが，在地の土釜は見当たらないようである。西部へは山陽産足釜・鍋が少数流入している。全体に土製煮炊具の出土量が少ないのは，日本海域に通有の事象といえる。

**調理・貯蔵具**

中世前期には，東播甕・壺・擂鉢と常滑甕が移入されているが，伯因へは美作・勝間田産調理・貯蔵具の供給が目立つ。出雲と伯因では，亀山系瓦製貯蔵器がかなり出土しており，在地で鍋・釜・足釜を併焼していたとみられる（松江市別所遺跡）。本地方も在地製品の比重がかなり高いようであるが，実態は詳らかでない。因幡の沿海部では越前陶器が出土し，日本海域の地域間相互交渉がうかがえる。

### (10) 九　州

九州は，主として煮炊具を指標に，北部（筑後・東肥前），東部（豊前・豊後・日向），西部（西肥前），南部（肥後・大隅・薩摩）に区分できよう。当地方の食器は，食膳具＝漆器＋土師器・瓦器＋舶載陶磁，煮炊具＝鉄鍋＋土鍋（釜），調理・貯蔵具＝国産陶器＋土師器・瓦器＋舶載陶磁の組成である。その特色は，中世Ⅱ期を画期とする大宰府系Ｒ種土師器による一定の斉一性，当地固有の土師器と一体的な瓦器の地域型の競存，②大宰府・博多を核とする中国陶磁食膳・調理・貯蔵器の卓越，③中世前期の土鍋，石鍋圏，後期の移入品を含む外（内）耳土鍋地域の顕在，④在地の煮炊・調理器生産の早期稼動と多様な小地域型の発達，⑤狭域向け須恵器生産地の存続（前期）と概括できる。

**食　膳　具**

古代の土師器・黒色土器（一部須恵器）椀・坏・小皿の組成が，筑前固有の底部押出し技法の普及や篦切り底から糸切り底への技法の転換に地域偏差（東部10世紀後半～11世紀後半，北・西部12世紀中葉）を孕みながら中世Ⅰ期まで遺存するが，11世紀末には土師器椀と器形・技法を共有する瓦器椀が筑前・豊前・肥後に出現する。Ⅱ期には国単位の地域性が希薄化し，土師器椀は消滅し皿形（大小）に統合されるとともに，舶載陶磁の供給量が少ない地域では，瓦器椀がⅢ期まで存続するとされる。ただし，日向では坏・小皿のセットがⅡ～Ⅳ期までつづきⅤ期に皿形に転ずるが，Ⅳ期には篦切り底が復活（西都市以南では糸切り底と併存）するなど在地色が濃厚である。Ⅴ期には豊後をはじめ各地で京都系皿Ｔ種が受容されている。肥後には須恵器系の下り山窯（球磨郡錦町，12世紀前半）が存在し，白磁模倣の玉縁椀を含む食膳具が定数焼成されているが，消費地では確認されていない。

中国陶磁器が一貫して食膳具で高い比重を占めるが，瀬戸美濃陶器は九州全域で散見にとどまる。

**煮　炊　具**

東・南部は不分明であるが，古代の球胴甕を主，球胴釜を従とする煮炊具は，中世Ⅰ期に若干の地域差をもって土鍋へ転換し，Ⅱ期には地域型として定着する。北部では，中世前期に口縁端に刻目・縄目を押圧するＬ字口縁鍋が肥後北部まで

分布圏を広げた。後期には15世紀代まで深身の玉縁口縁鍋が多用され16世紀後半には外耳鍋が主体をなし，その系譜を引く深身素縁の瓦製丸鍋，近世Ⅰ期につづく中国鉄鍋に近似した浅鉢形鍋も併用されている。くの字口縁鍋が主流で，14世紀前半から在地の別型式へ転じ近世Ⅰ期まで存続するなど，中域・狭域の地域性が顕著である。また，西肥前は11～15世紀を通して西彼杵半島産の石鍋圏であって，前期には北・西部，肥後でも定量出土し，大宰府では土鍋より出土量が多いという。Ⅳ期以降は自給的供給にとどまり，Ⅴ期には筑前・東肥前の玄海灘一帯から西肥前には周防型足鍋が流布し，肥後中心の外耳鍋圏と併立した。

**調理・貯蔵具**

中世Ⅰ・Ⅱ期は，東播甕・壺・擂鉢が主流に，常滑，十瓶山などの製品も少量移入され，とくに北部では中国黄褐釉壺・擂鉢（一部朝鮮陶器）の使用が目立ち，遺跡・地域別の量比差を考慮しても九州の一円的な特色といえる。Ⅲ期は西国共通の常滑甕・壺＋東播擂鉢が広域流通したが，北部と肥後では13世紀前半から在地の擂鉢（肥前ではⅢ期に茶釜）が出現し，Ⅲ期には在地の生産体制が確立する。樺万丈窯(荒尾市)では擂鉢・鍋・釜から甕・壺・擂鉢生産へ移行するようで，肥後・豊前などでは常滑・東播・備前製品は劣勢である。後期には煮炊器を含め土師製から瓦製に転ずるが，東・南部でも一国で複数産地の卸し目を有する瓦・土師製擂鉢が茶釜・把手付鍋・火鉢・風炉・花瓶・香炉などとともに生産された。このため，15世紀代の備前甕・擂鉢は少量で，普遍的な流通は16世紀に下る。後半も中国貯蔵器，少量ながら朝鮮・タイ陶器が国産陶器を補完している。

### (11) 沖縄・南西諸島

沖縄・南西諸島は，政治・文化的に列島と異相の大地域をなし，別個の食器および食習俗圏を形成した。当地は通常，トカラ・沖縄・先島諸島に大別され，地域区分は在地土器（グスク土器）を指標に具体的な検証がすすめられているが，移入食器への依存度が高まる中世（グスク時代）は総体的に斉一性を強めているので，包括的に要約する。当地の食器は，食膳具＝土器＋舶載陶磁（＋漆器？），煮炊具＝鉄鍋＋土鍋・釜，調理・貯蔵具＝在地須恵器（前期）＋舶載陶磁＋移入国産陶器（後期）の組成である。その特色は，土製食膳・煮炊器（グスク土器）の一体生産と供給，②中国陶磁食膳・貯蔵具の比重の高さ（後期），③土器主体（前期）の多器種な煮炊器の使い分け，④須恵器貯蔵器（徳之島町亀(カムイ)窯産），石釜（前期），中国陶磁，備前陶器（後期）の一円流通に在地製品の欠落と概括できる。グスク土器は10～11世紀に定型化され，洪武５年（1372）の対明進貢貿易を契機とする中国陶磁と鉄釜の移入によって消滅に向かうとされるが〔安里進〕，それ以前の私貿易の展開をも考慮した消長の確定が必要であろう。また，グスクの食器組成は列島の城館主層に近似し，一般遺跡と異なることは十分予想できるが，データに恵まれない。

**食 膳 具**

土製椀（大小）が主体で，有台椀・玉縁椀はまれである。須恵器椀（亀焼）にもグスク土器と器形・法量が同じ椀があるが，消費地では目立たないようである。後期に城館主層が中国陶磁を集中的に所有するのは列島中央，北方と変わらないが，民間への普及度は不透明である。

**煮 炊 具**

くの字口縁平底甕，内湾口縁鉢，くの字口縁鍋，石鍋写しの内湾口縁釜に分類されており，稲福上御願遺跡・糸数グスク出土グスク土器の量比は，食膳器10～20%，煮炊器40～50%，貯蔵器20～40%ほどである〔安里進〕，後期には鉄鍋に置

換されると推定される。グスクで畿内・山陽の土鍋・釜がまれに出土する。

**調理・貯蔵具**

亀焼窯では擂鉢は少なく，消費地でもほとんど出土しないようである。Ⅳ期後半からⅤ期に備前擂鉢が定量流通しており，薩摩でも出土している叩き石・石皿も存するので，列島とは量的に大きな懸隔があるが，粉食加工は行われている。貯蔵具は中世前期は大甕・中小壺など亀焼製の多様な貯蔵器と土製小壺，後期は中国陶磁と備前陶器が定量存するようである。

**註**

(1)――橋本久和「中世土器の地域色と流通」『考古学研究』26-4 (1980)，菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』(1983) などの先行文献がある。

(2)――森　隆「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について―西日本の土器椀生産を中心に―」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ (1992) ほか。

(3)――この点は筆者も中世窯業生産の一特質として指摘してきた (『中世須恵器の研究』1994，16頁以下)。

補注　11地方の記述にあたっては，第1部の各項および下記文献をはじめとする個別論文・報告書を参考にしたが，文献の大部分が各項で列挙されており，再度引用する煩雑さを避けるため割愛させていただいた。

(4)――鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器―模倣系土器生産の展開―」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ (1988)，同「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』(1994) ほか。

(5)――「アイヌ」は，一般に近世以降の北海道の住民をさす用語として用いられている。しかし，旧石器併行期以降，北部のオホーツク人を除けば固有の形質的特徴を保持しており，列島中央 (「和州」) および北方隣接圏との経済・文化交渉を介して，生活様式を変容させつつ民族文化が段階的に創造された点を重視すれば，将来アイヌ独自の時代指標で冠名されるまでの期間，列島中央の時代区分との対応関係を軸に，擦文アイヌ時代－中世アイヌ時代－近世アイヌ時代ととりあえず仮称するのが妥当視される。

日本中世土器研究会　『中近世土器の基礎研究』Ⅰ～XI (1985～96)
同　『概説　中世の土器・陶磁器』(1995)
日本貿易陶磁研究会　『貿易陶磁研究』1～16(1981～96)
東国土器研究会　『東国土器研究』1 (1988)
北陸中世土器研究会　『北陸の土器・陶磁器・漆器』など研究会資料集 (1988～94)

## 補論　椀と皿

11世紀中葉と12世紀中葉の2段階の画期を経て成立する中世的食器の特質は，器種・器形・法量の単純化，成形・調整・加飾技法の省力的改良と，とくに都市域における高度の産地・器種別複合として要約できる。具体的には中世前期の食膳具は椀と小皿ないし椀と坏（大皿）・小皿の「一器種一法量」〔吉田1986〕の基本セットを構成し，漆器をベースとしつつ，A東海・中部高地の灰釉系陶器，B畿内と周辺，四国の大半，およびC九州北・中部の瓦器（一部黒色土器），D山陽東部と四国の一部（讃岐）の須恵器，E山陽中・西部，山陰，九州南部の土師器が，列島全域で普遍的に出土する中国陶磁と複合しつつ地域性を形成している。この土製食膳具によるA～Eの中地域区分は，それぞれ，A土鍋（南勢型）→内耳土鍋，B土釜主流，C～E土鍋の各地域型にほぼ対応する。

食膳具のうち，灰釉系陶器・瓦器・須恵器・漆器・中国磁器は椀＋小皿で一応完結するが，東西を問わず土師器皿（大・小）が存在し，これと椀・小皿の関係が問題となる。このため，土師器が主たる椀形態なす山陽中・西部から山陰，九州にかけての土師器ゾーンでは，椀＋坏（大皿）＋小皿がセットを構成し，瓦器など一連の椀＋小皿セットのごとく椀と坏・小皿の区分が明瞭でない。椀＋小皿の原型は，10世紀半ばごろ，9世紀初め以来の磁器型椀皿セットに代わる越州窯系青磁碗Ⅲ類を規範として登場した灰釉・緑釉陶器，黒色土器，土師器の輪高台深椀であった(1)ことは，今日大方の共通認識といってよいであろう。この段階の食膳具組成の改組は，椀形態のモデルの変更にとどまらず，須恵器の撤退と高坏・盤の消滅，食器の主体となる土師器，黒色土器有台・無台椀・皿に小皿が加わり，椀＋小皿の中世食膳具の原型が準備される〔森1990・91ほか〕。これを地域性の視点からみると，畿内と九州北部を核とする黒色土器から瓦器へ転化するゾーンと，黒色土器が衰退し土師器主流へ移行するゾーンに二極分解し，中間に灰釉陶器→灰釉系（無釉）陶器，須恵器の存続・復興地域を配して中世の起点となった画期であった。

こうした変化は，西日本では河内楠葉窯産黒色土器B類，近江産緑釉陶器，丹波篠窯産捏鉢，東日本では津軽五所川原窯産須恵器に代表される特定器種特産地の形成と広域流通〔宇野1989ほか〕，あるいは燃焼効率の高い各種小形閉塞窯の普及という点とも表裏をなしている。その際とくに重要なのは，後述する土製煮炊具の急減と，東北北部で論証がすすめられている日常食膳具の土師器から漆器への置換の進行である〔三浦1990〕。10世紀後半代の当地域の漆器椀は，高い平高台と身を結合する特異な形式であるが，11世紀半ばごろ以降高速回転の木轆轤の導入によって薄手の輪高台椀も出現し，粗質，量産型の渋下地塗漆器への転換〔四柳1991〕が，北海道のアイヌ社会をも包括して急速に展開したと考えられる。そのことは，北陸の在地領主居宅や東北の多賀城で10世紀前半ごろから土師器椀皿の一回性的な廃棄が目立つようになり，少数となった比較的精製な黒色土器のみに使用痕が認められ日常食器として使用されているという指摘〔村田1995〕をうけると，従来東日本における黒色土器衰退の理由については統一理解が示されていないが，木食器の普及を直接の契機と考えることができよう。

西日本の状況は詳らかでないが，前記のごとく10世紀半ばを起点とし，11世紀中葉には東日本と

対照的に古代後Ⅲ期以来の分布領域を踏襲し，畿内における瓦器椀の創案に触発された吉備型土師器椀に代表される多様な器質の椀・小皿を定型化させている。そのばあい，山陽中・西部の椀が硬質な器面に入念な磨きを施した白土器として成立するのをはじめ，中世Ⅰ期に讃岐平野や，筑前早良平野の土師器椀，肥前佐賀平野，東彼杵郡の瓦器椀〔森1992〕，肥後下り山窯，薩摩阿三カムイヤキ窯の須恵器椀など小地域で少量ながら白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類写しの椀が製作され，東海でも知多窯の数地区で少量ながらかなり普遍的に玉縁口縁の灰釉系椀が生産されており〔柴垣1985〕，胎土が緻密な11世紀以降の瀬戸窯の椀・皿が白磁碗XI類→竜泉窯系青磁碗Ⅰ類＋同安窯系青磁皿Ⅰ類をモデルとして推移したとする見解がある〔小野1992〕。このように，椀に象徴される中世の食膳具は，「金，銀，朱漆，瓷，雑器」（『延喜内膳式』），すなわち金属器―漆器（朱器―黒〈烏〉器）―舶載陶磁―国産施釉陶器（多彩釉―緑釉―灰釉）―各種土器・陶器（黒色土器―須恵器―土師器）の身分制序列を表現する古代の食器制が解体し，金属器―中国陶磁―各種器質の土器・陶磁および粗製漆器として単純化され，民需品として普及したといえよう。

ただし，上記の器質の異なる椀＋小皿の食膳具は西日本および中間地帯の東海に限られ，東海東部（駿河以東）と北陸以北の東日本では中世Ⅱ期以降土器椀は基本的に存在せず，土製煮炊具の有無も含め中世の開幕とともに東西日本の大地域性が顕現化したところに，中世食器の第２の特質が求められる。そして，この東西日本にみられる大地域性は，食膳具＝漆器，煮炊具＝鉄器を基幹とする中世的食器様式への移行が東日本でより徹底して進行したと評価でき，そうした東日本の食器にみる生活史レベルの中世的変革の主体性が，終始都城を核とする求心的な西高東低の様相をとった古代と異なる点は特筆すべきであろう〔吉岡1994B〕。

ここで，まず中世食膳具の中心が漆器であったことを確認しておきたい。11～12世紀代の資料は分散的であるが，たとえば中世Ⅰ期の浦刀禰級小領主の館跡に鍛冶場が付設された石川県田尻シンペイダン遺跡〔田嶋・平田1979〕で，墓壙とみられるSKIから出土した白磁碗１・漆椀１・漆皿２（１点は内赤外黒）・土師器皿２・箸３は，葬送祭式の器であるだけに日常食器とは区別して考えねばならないが，飯椀・汁椀・菜皿・調味料皿のセットを垣間みることは可能であろう。本遺跡に限らず，11世紀後半～14世紀前半の西日本の屋敷墓では，漆器の遺存例は少ないが，中国磁器碗＋土師器小皿各１ないし１～２と４～６の組み合わせが，画一的かつ普遍的に存在し〔橘田1993〕，都市・村落上層民の一部愛用品を含む黄泉竈喫的な食膳具セットのモデルとみて大過あるまい。13世紀以降は鎌倉で豊富な資料があり，土師器皿を除く食膳具の量比は，町屋地区に属する千葉地東遺跡〔服部1994〕（中世Ⅱ新期・Ⅲ期）で，漆器40～50%，中国磁器30～40%，寺院工房とみられる佐助ヶ谷遺跡〔大三輪・斉木1993〕（中世Ⅲ期）で漆器62%，中国磁器25%，他13%と安定した数値がえられ，85%前後を占める漆器・中国磁器碗皿類が食膳具の主体であったことが知られる。

また，広島県草戸千軒遺跡〔下津間1991〕（13世紀後半～16世紀前半）でも1,700個体以上が確認され，遺存率を考慮すれば西日本の地方都市でも漆器が食膳具の基調であったとみられる。京都で畿内で唯一瓦器　がほとんど使用されなかったのも，中国磁器碗・漆器椀が主体だったからであろう。

漆器が東・西を問わず日常生活用具として普及していたことは，絵巻物でつとに検証されており〔安田1983〕〔山本1994〕，椀皿のほかに，飲食具（鉢*・壺*・提子*・水瓶*・香炉・托*・茶入・

杓文字*・匙,〈*は絵巻物・遺物で確認,－は遺物のみで確認〉),貯蔵具(曲物*・篭・太鼓樽),膳具(高杯・衝重・懸盤・台盤*・盆*・折敷*),調度具(硯・文・鏡・手・円箱,角盥*・炭櫃・灯台),武具(刀柄・鏑・鞍),遊戯具ほか(碁笥・独楽・物差・櫛)などが知られている。これら多様な漆器の大半が粗製量産型の渋下地塗椀皿で,特殊器種が高級な漆下地漆器であったことは塗膜の赤外線吸収スペクトル分析法などで明らかにされつつある〔四柳1995〕。そして,椀・皿にほぼ限定されたとはいえ,漆器の普及が公武顕貴層・寺社にとどまらなかったことは,絵巻物の脚色を考慮するとしても,紀伊国の猟師(「粉河寺縁起絵巻」,12世紀後半),病に悩まされる男女(「病草紙」12世紀後半),絵師(「絵師草紙」,14世紀初),大工(「春日権現験記」,14世紀初),乞食(「一遍上人絵伝」,1299年ほか),頭上運搬する女(同上),放下僧(「慕帰絵詞」,14世紀後半)など絵巻物に登場する市井の人物描写からうかがうことができる。そして,『海東諸国記』(1471)にみえる「国俗　飯食に漆器を用う。尊処には土器を用う。ひとたび用いれば即ち棄つ」という記事は,中世後期のあり方を端的に伝えている。

それでは,漆器を食膳具のベースとしながら,東海から西日本の各地で一円的に実在する各種土器食膳具はどのように評価すべきであろうか。これら土器食膳具を象徴する椀は,〔Ⅰ類〕輪高台椀(灰釉系陶器・瓦器・黒色土器・土師器),〔Ⅱ類〕円盤高台椀(須恵器,西丹波の須恵器型瓦器など),〔Ⅲ類〕無高台椀(土師器〈山陽西部・山陰・四国の一部〉)に大別でき,Ⅰ類は越州窯系深碗をモデルとした磁器型B類,Ⅱ類は9世紀以来の磁器型A類,Ⅲ類はⅡ類の間接的な影響をうけたものもあるが,基本的に在来の土師器の系譜を負う。そして,Ⅰ～Ⅲ類が渋下地塗漆器を含め,型式・地域差を超えて器形・法量,ひいては機能面で互換性を共有していたことは,たとえば各種土器が併用され讃岐・川津元結木遺跡〔片桐1992〕における13世紀代(Ⅱ-8・9期)の食膳具組成が,土師器椀・坏・小皿61%,須恵質椀・坏・皿25.5%とこれを補完する畿内系瓦器椀・小皿6.5%,吉備型土師器椀3%および少量の中国磁器碗で構成されていることによく示されている。また,近江は,北陸に通じる湖北西部で椀形態が欠落し,湖東は14世紀代まで黒色土器ゾーンとして推移するが,野洲町付近の狭域には黒色処理を施さない同類の土師器椀がみられ,東央南部の蒲生郡には大和型瓦器椀,湖北には灰釉系陶器椀が流入する複雑な小地域の複合的様相〔森1993〕もその証左となろう。

ところで,西日本の土器食膳具については,器質や出土状況から非日常的な食器とする見解がある。灰釉系陶器について赤羽一郎は,中部高地でみられる灰釉陶器と灰釉系陶器流通量の格差,および伝導率が高く水分を含むと脆弱な灰釉系椀は,汁物の盛行から生じた〝犬喰い〟の食法に適さないとする〔赤羽1987〕。灰釉系椀はほぼ13世紀代のうちに終息し,以後東濃・瀬戸窯のみ稼動するが,9型式(14世紀中葉)には薄手・皿化し内面に渦状痕を作出するようになるとともに,供給範囲が狭まり需要量が大幅に低下し,春日井市白山神社遺跡〔立松1971〕の大量廃棄例(小皿主)にみられるごとく土師器皿に代る祭器,大窯期以降は灯明皿として存続する。瓦器椀については,和泉型Ⅳ-Ⅰ期(13世紀中葉前後)に急速に法量が縮小し,高台機能を喪失して皿化し〔尾上1983〕,大和型でもⅣ-A期(14世紀初)には丸椀化し非日常用器へ転ずると考えられている〔竹田1994〕。大和型のばあい,たとえば,奈良市十六面薬王寺遺跡で検出された14世紀代の溝区画をもつ屋敷跡では,完形のいわゆる湯呑形瓦器が大量に遺棄された地点があり,村落の行事や祭祀に供されるよ

うになった実態の一端を伝えているとされる。また，山陽中部の土師器椀・坏・小皿について草戸千軒遺跡（13世紀後半～16世紀初）の出土状況を点検した鈴木康之は，土坑・池・溝・井戸などの遺構の埋め戻しに伴う地鎮的儀礼に使用痕のない完形の土師器セットが大量に供献されていると考え，とくに14世紀後半以降そうした事例が目立つようになるとし，日常食器としての使用に否定的である〔鈴木1989〕。

一方，東日本における土師器皿については，中世Ⅱ期に東北北部まで一円的に京都系土師器皿Ｔ種が流布したのを現実的契機として，在来のＲ種をＴ種に同化しつつ皿形（大小）に単一化し大量消費する形で古代的食器を解体に導いた。藤原良章は，この現象を都市的な場での大量の使い捨ての属性の表現とみて，「中世を代表する食器，あるいは中世の供宴の意味を象徴する食器」〔藤原1988〕と概括した。上記西日本の各種土器椀をその成立当初，あるいは中世Ⅲ期以降非日常的食器に転化したとする主張は，一見藤原説が西日本でも適用できるかにみえるが，中世Ⅰ期に一定の地域領域で中世的食器組成の定型化を完了し，Ⅱ期の京都系皿Ｔ種の直接の洗礼をうけなかった畿内以西，とくに土師器椀・坏・小皿がセットを構成する瀬戸内中部以西で，「饗宴」に供された器種が何であったのか，あるいは椀と坏・小皿を区別して取り扱うべきなのかは明らかにされていない。

中世を通して京都の土器・陶磁器の90％以上を占める土師器皿について伊野近富は，大皿１・小皿３を一具として，一戸主（約500m$^2$）の年間の消費量は約42具（耐用8.6日）とみている〔伊野1995〕。また，京内の出土状況を吟味した鋤柄俊夫は，時期が下ってもとくに機能面での低下が認められない上に，葬送・地鎮などの呪祭に伴う事例はせいぜい10～20％ていどで，大部分は煮炊具や陶磁器とともに包含層的状態で大量廃棄されているとして，日常食器として使用されたと考えている。ただし，ここでも14世紀中葉以降，多数の土師器皿に鍋，ミニチュア羽釜，須恵器鉢など若干を入れた土坑（烏丸線73TSK17・80TSK55など）や土師器皿を100～150枚単位で供献した木棺墓（左京５条３坊15町墓Ａ・Ｃなど）など多量一括使用例が目立つようになる〔鋤柄1994〕。

中世後期に土師器皿の使用法に変化が現れることは，前記の葬送・地鎮などの呪祭のほか，灯明皿としての使用頻度が高くなることも機能転換の重要な指標となる。たとえば，加賀西部ではこの段階に法量規格が再編され，厚手・丸底タイプの小皿が多用されるが，妙法院領白江庄の一角を占める白江梯川遺跡の井戸資料では，14世紀後半に油煙痕をもつ土師小皿が初現し，15世紀以降ほとんどの遺跡に認められるようになるという〔藤田1992〕。灯明皿の高頻度使用は，15世紀末～16世紀代には各地で検証できる。たとえば，福井県朝倉氏一乗谷遺跡本館跡では，少量の灯明器専用とみられる粗造の土師器皿Ｂ類（口径７～7.5cm），およびＣ類（口径７～９cm），$D_1$類（口径9.5～10cm）のそれぞれ61％と31％に油煙痕の付着が認められ，完器の43.7％に達する〔福井県教育委員会1997〕。また，伊勢の北畠一族の大河内城の西に所在する松坂市嵩谷（ききたに）遺跡では，小皿の大部分と中皿の14％は灯明皿とされている〔野田1988〕。こうした灯明皿のあり方は，中世後期には村落部で土師器が急減する反面，中世Ⅴ期に波及する京都系皿Ｔ種の第二次波及に典型的にみられる，城館での饗宴器の一過性の集中消費と結びついていることは明らかであり，さきの各種の呪祭行為に伴う土師器の多量使用が，使用段階と場と機能の変質に緊密にかかわる動向として理解すべきであろう。なお，京都の土師器皿は，13世紀後半以降，深草産の褐色土器に代わって嵯峨→播枝産の白色土器が主流を占め，法量分化が段階的にすすみ，元応２年（1320）に「○度入」（『海人藻芥』）

として初見する重ね皿型式の儀器として中世Ⅴ期に民間へも普及する。そして，16世紀代には正月祝など祝儀の膳一式を構成する「土器物」をはじめとする一過性の食器として定着し，大量に消費されるようになる〔横田1981〕。

したがって，問題はとりあえず中世前期の各種土器椀＋小皿のセットが日常食器であった時期が存在するのか，ひいては西日本では村落部も含め大量に消費された土師器皿（大小）ないし坏・小皿が日常的な食膳具として漆器と併用されたのかどうかに絞られることになろう。

ここで課題に迫る一方法として，従来あまり注意されてこなかった椀と小皿の量比をみてみたい。灰釉系椀・小皿は，窯跡の天井が崩落し正確な生産量を把握できる事例がほとんどないが，焼台数から椀窯１回の焼造数は椀皿6,000～7,000個体ほどと算定されている。渥美窯坪沢２号窯〔吉田・小野1971〕（12世紀）では椀1,273点，小皿631点でほぼ１：0.5となっており，椀13～14枚の上に小皿３～４枚を乗せ，ときに分焔柱の脇などに小皿のみを重ね焼するのが一般的とされるが〔杉崎・磯部1979〕，椀１対小皿0.1ていどの事例〔田口・若尾・山口1985〕もある。この推定値は消費地ではやや異なり，尾張西部平野の代表的な村落遺跡である清洲町土田遺跡〔城ヶ谷1991〕（12世紀前半～15世紀）では灰釉系椀皿が食膳具の96%，土師器が多い優位村落とみられる同朝日西遺跡でも75%に達し，前遺跡では口縁部計測法で椀１対小皿0.53，総破片数計量法では量比差が拡大し１対0.19である。また，土師器皿の比率が比較的多い三河東部の村落遺跡豊川市郷中，豊橋市公文両遺跡（ともに12世紀後半～14世紀初）でも食膳具の約80%を占め，椀１対小皿0.3～0.35の数値がえられている〔藤沢1990〕。

瓦器椀・小皿は，畿内では高石市伽羅橋遺跡〔森・石部・宇田川1956〕で１対0.55，堺市菱木下遺跡〔佐久間1984〕（13～15世紀）で12対１，畿外では播磨西部の法隆寺領斑鳩庄の故地として知られる竜野市福田天神遺跡〔鈴木ほか1982〕で１対0.27，畿内系瓦器椀を大量に移入した阿波と讃岐を代表する臨海庄村落遺跡である，徳島市中島田・南島田遺跡〔福家・小笠原・久保脇・北原1989〕（14世紀中心）と坂出市川津元結木遺跡〔片桐1992〕（13世紀）で，それぞれ１対0.34と１対0.12となっており，両遺跡に限らず食膳具を移入する地域では椀が圧倒的に多い。帰属年代を捨象した数値のためばらつきが大きいが，椀を少なめに見積もっても椀３～４対小皿１ていどかと推量される。なお，九州北部の瓦器は小皿がとくに少ないようである。須恵器については，東播周辺窯で椀皿を主体に焼造した繁田窯〔丸山・山本1988〕（12世紀）では，椀と小皿の量比に留意し瓦器との比較も行われているが，当窯の資料では椀１対小皿0.07で小皿が極端に少ない。また，魚住窯〔大村・水口ほか1983〕では，38号窯（小形閉塞窯）で椀１対小皿2.2という例外があるものの，片口鉢・甕を中心に焼造した29号（12世紀後半～13世紀前半）では，それぞれ１対0.2，１対0.4となっている。消費地のデータに恵まれないが，神出窯工人村落遺跡で検出された土器溜は焼成不良品と消費資料が混合していて問題を残すものの，およそ椀１対小皿0.2ほどと算定されている(2)。

このようにみてくると，各種土器椀と小皿の量比は材質差を超えて椀が卓越し，規則的な定量化は難しいものの，大体椀３～４対小皿１ていどかと思われ，単純に飯椀・汁椀＋菜皿・調味量皿の組成を想定すると，食器セットとして完結しないと考えざるをえない。しかも，椀と小皿の不均衡は中国磁器についてもいえるのであって，大宰府で碗２対鉢・小皿１前後とされ(3)，鎌倉では佐助ヶ谷遺跡で碗１対小鉢・皿0.65（皿の70%は白磁Ⅸ類），今小路西遺跡でも碗と小皿で１対0.5

(76%は白磁IX類）で佐助ヶ谷遺跡に近いが，小鉢を加算すると碗と小鉢・皿は1対0.9でほぼ等量となる〔田代1995〕。ただし，中国陶磁が広範に流布する中世Ⅲ期の一般遺跡では鉢類の出土量は少なく，竜泉窯系青磁碗$I_5$・Ⅲ類＋白磁皿IX類の組み合わせが基本なので，やはり1対0.5ほどで小皿は不足することになろう。

このようにみてくると，各種の土器・陶磁器では埦が小皿をかなり上回るが，漆器は埦と小皿が拮抗ないし小皿が多いようで，13，14世紀代の鎌倉では佐助ヶ谷遺跡〔大三輪・斉木1993〕の椀1対小皿1.95を平均的な数値とみていいようである。草戸千軒遺跡〔下津間1991〕では椀1対小皿0.4と報告されている。定量比データが不備であるが，想定される食膳具セットからすると，漆器も小皿数が十分充足されていたとはいい難く，浅めの平椀も菜用と考えるべきであろうが，古代食膳具を特徴づける土製ないし木製高坏・盤が欠落する中世食器では，魚肉類を盛る適当な器が見当たらない。このように，特定材質の埦・小皿のみで食膳具として完結しないことは，漆器を留保すると土器食膳具が埦を主体に生産・消費されるものであったこと，器質・材質の異なる食膳具を適宜とり合わせて使用していたことも想定され，さきの屋敷墓の供献セットもそうした状況を反映しているごとくである。草戸千軒遺跡の漆器組成は，15世紀後半～16世紀前半には椀1対小皿0.09ほどに大きく変化するとされ，同様の現象は愛知県清洲〔梅林1987〕，石川県七尾両城下町遺跡〔四柳1995〕でいずれも椀が約90%を占め，内赤外黒漆器の普及とともに当該期の特色となっており，東海・北陸のばあい瀬戸美濃大窯で量産された小皿による補完が考えられることに一端が示されている。

ところで，土器埦が大量消費された地域で，中世Ⅰ・Ⅱ期には漆器椀・中国磁器碗とともに日常食膳具として使用されたことは，灰釉系陶器埦の多くの内底から内側下半にかけて磨耗痕が認められ，これと別に内底と口端部に著しい磨滅痕を有し小形擂鉢的な用法を考えさせるものが，名古屋市三ノ丸遺跡では灰釉系埦の約20%を占めるという(4)。その点は，九州北部でも中国陶磁の出土量が希薄な周辺部で瓦器埦が使用されているという指摘〔山本信夫・第1部11項〕や，京都で瓦器埦が普及しない理由を中国磁器碗・漆器椀の盛用とするのも，間接的ながら各種土器埦の実用性の傍証とできよう。瓦器・須恵器・土師器埦の使用痕に関する観察データは管見に入っていないが，土器埦皿はすべて日常的な消耗品として大量に供給・消費されたとはいえ，灰釉系陶器のごとく一定期間使用されたことも確かであり，中世社会の消費形態とモノ資料の価値感を測定する有力な素材となる。なお，こうした消費形態は，渋下地塗漆器についてもいえそうで，鎌倉で大量に出土する漆器のうち佐助ヶ谷遺跡で78%を占める有文の椀には文様が磨滅するほどの使用痕はあまり認められず，厚手の無文椀皿の使用痕が顕著とされる(5)。鎌倉のばあい漆器の安定した供給体制が確保され，土師器や中国陶磁を含めた都市固有の大量消費志向が認められ，村落部で普遍化できるかどうかは今後の検証をまたねばならない。このように，土器埦と小皿を日常的な食膳具としてよければ，それを使用した東海以西では13世紀半ばごろまでは，食膳具でかなり大きな比重をもっていたと推定できよう。

それでは，土師皿（大小）ないし坏・小皿も埦に準ずる使用形態が考えられるのであろうか。土師器皿は京都で90%を超すのをはじめ，畿内の村落部でも食膳具の60～70%を占めると推定され，大皿と小皿の量比は院近臣の役宅が営まれた白河北殿北辺にあたる京都大学構内遺跡（12世紀中葉

～13世紀前半）のように大皿1対小皿4～6を示し饗宴具の量比に対応する例〔宇野1981〕もあるが，一般に1対2ほどかと思われる。土師器皿（〝カワラケ〟）の性格に関する私見は，「緑釉陶器のごとく官製品として制度的に創出されたのではなく，簡便化を志向する民需用食器の極限ともいえる産物」で，饗宴・儀礼具であるとともに，「民衆の日常的な〝ケ〟＝〝私〟の食器としても大量に消費され」る二面性を具備し，「〝下剋上の文物〟ともいうべき中世的論理」〔吉岡1994A〕が見出せるとした。上記の各種土器小皿の不足分に土師器皿を充足すれば，数量的な問題はかなり処理でき，山陽中部以西の土師器椀・坏・小皿がセットで使用されたゾーンでの説明も容易になる。そして，土師器皿が補助的食器として使用されたことを端的に示すのは，絵巻物にみえる「店」の場面であって，『橘直幹申文絵詞』（13世紀末）に曲物大桶から菜をとり出し小皿に入れ店頭に並べているのが周知され，『一遍上人絵伝』の京都四条（歓喜光寺本）や大津の街道沿いの店（東博本）でも土師器皿とみられる菜皿が描かれている。土師器皿が畿内以西で補助的な食器として機能したと考えられる中世前期と，完全に儀器化し城館で集中的に消費される後期は，各種土器椀および「○度入」の土師器重ね皿型式の消長と整合しており，中世前期は土師器皿が食器組成から撤退する過渡的な段階と理解しておきたい。

ところで，中世前期の東海以西で，土製食膳具が日常食器として一定の役割りを分担しえた理由として，東日本のごとく古代後Ⅲ期には漆器への置換が急速に進み，土器生産が衰退していったのと対照的に，土器・陶器食膳具の生産が継起的に存続し，河内・楠葉窯に代表される黒色土器B類から瓦器へ生産技術の中世的改変を行いつつ，内膳司などに身分的に従属する一方で，民間へ製品を供給する小商品生産者として，自立的な経済活動を展開していたことがあげられる。これらの土器生産工人は，古墳中期以来の器質別（須恵器と土師器），あるいは10世紀半以降の器種別（黒色土器B類椀と土師器皿）の分業的補完ないし互換関係を保持した畿内と，他の西日本のごとく器質・器種別分業関係が未熟な地域に区分されるが，いずれもほぼ11世紀後半代のうちに，畿内の主導下に中世的食器組成の地域領域を固め，コスト安の生産原理を志向しつつ郡以下の単位で小流通圏を保持し，境界域で競合しあっていたとみられる。

かかる土器の生産・流通体制の存続は，12世紀中葉以降，器種が土師器皿（大小）のみに淘汰された東日本とは異質であり，11世紀以降，機能性が高く旅などにも便利な漆器食膳具への転換を遅らせ，いぜん土器食器になじむ伝統的な食器使用習俗，ひいてはそれを規定した粗質・廉価な製品の多量消費志向に支えられる面があったと思われる。この問題は，官衙・寺社顕門に奉仕しながら，「座」的同職組織をもち一定の自立性を確保していた畿内＝首都市場圏の職能民と，他の西日本および東日本のそれとの差異に帰着するはずであるが，ここではこれ以上ふれない。11世紀後半代に確立した土器食膳具組成は，ほぼ13世紀半ばまでに草戸千軒遺跡に具象される渋下地塗器の広汎な進出と，中国陶磁供給量の相対的増加が，土器椀を駆逐あるいは機能転換させる結果になったと考えられる。なお，鉄器煮炊具は，中世Ⅳ期以降，Ⅲ期につづく在地生産発達の第2段階で，大和，河内・和泉など西日本の一部で一段と消費量が高まるとともに，東日本でも15～16世紀前半代には東北南部の一部と関東・東海，とくに中部高地で内耳土鍋を使用する消費形態が復活する。この現象は，東日本が粗質・廉価な西日本の生産原理へ同化される面があったことを示すと思われるが，それは鉄製煮炊具の供給量の不足に起因するのでなく，補助的にせよ土鍋を使用するほど消費総量

が増大したと考えねばならない。

以上，中世食器の地域性をテーマとしながら，その前提とする食膳具の機能についての覚え書にとどまり，東西日本の大地域性の理解も従来の私見〔吉岡1994B〕を繰り返すにとどまった。中世食器の時期別地域性と生産・流通関係については稿を改めたい。（未完）

## 註

（1）――〔前川要1984〕ほか。なお，折戸53・東山72号窯式の深埦を越州窯系青磁碗の模倣とする見解は，楢崎彰一が「日本出土の宋元陶磁と日本陶磁」『シンポジウム　新安海底引き揚げ文物』中日新聞社（1982）の発表で言及したのが最初とされる。

（2）――神崎勝提供資料。

（3）――山本信夫ご教示。

（4）――尾野善裕ご教示。

（5）――斉木秀雄・伊丹まどかご教示。

## 引用・参考文献


赤羽一郎　1987「山茶椀に関する若干の考察」『マージナル』7

伊野近富　1995「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』

宇野隆夫　1989「白河北殿北辺の土器・陶磁器」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』

宇野隆夫　1989「後半期の須恵器」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』

梅村清春　1987「清洲城下町遺跡出土の木製挽物漆器について」『愛知県埋蔵文化財センター　昭和61年度　年報』

大三輪龍彦・斉木秀雄　1993「総括」『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』第2分冊

大村敬通・水口富夫ほか　1983『魚住古窯跡群』兵庫県教育委員会

尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』

尾野善裕　1992「モデルとコピーの視点からみた古瀬戸と中国陶磁―古瀬戸成立期(12・13世紀)の様相―」『貿易陶磁研究』12

片桐孝治　1992『川津元結木遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

橘田正徳　1993「中世前期における土葬墓の出土供膳具の様相」『貿易陶磁研究』13

佐久間貴士　1984「大阪菱木下遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』4

柴垣勇夫　1985「山茶椀と白磁碗について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』4

下津間康夫　1991「草戸千軒町遺跡出土漆器類観察ノート―椀・皿の編年試案―」『草戸千軒』216

城ヶ谷和弘　1991「土田遺跡」Ⅱ，愛知県埋蔵文化財センター

鋤柄俊夫　1988「畿内における古代末から中世の土器―模倣系土器生産の展開―」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ

鋤柄俊夫　1994「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』古代学研究所

杉崎　章・磯部幸男ほか　1979「小原池古窯址群」小原池団地遺跡調査団

鈴木重治ほか　1982『福田天神遺跡』竜野市教育委員会

鈴木康之　1989「土師質土器の用途に関する研究ノート(1)(2)」『草戸千軒』197・198および本研究報告　第1部12項

田口昭二・若尾正成・山口伸浩　1985『小名田西ヶ洞2号・3号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会

竹田政敬　1994「大和地域における瓦器椀の使用について」『大和の中世土器』Ⅱ

田代郁夫　1995「中世都市鎌倉における遺跡の画期と出土中国陶磁」『青山考古』12

田嶋明人・平田天秋　1979『加賀市田尻シンベイダン遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会

立松　宏・宮川芳照　1971「白山中世遺跡」『春日井市遺跡発掘調査報告書』

野田修久　1988「三重県松坂市嵜谷遺跡出土の土師器皿について」『マージナル』9

服部実喜　1994「南武蔵・相模における中世の食器様相(2)」『神奈川考古』30

福家清司・小笠原賢・久保脇美明・北原雅代　1989『中島田遺跡・南島田遺跡』徳島県教育委員会

福井県教育委員会　1979『朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅰ，86～90頁

藤沢良裕　1990「付編2　山茶碗と中世集落」『尾呂』瀬戸市教育委員会

藤田邦雄　1992「加賀における様相―土師器―」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会

前川　要　1984「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相―瀬戸市百代寺窯出土物を中心にして―」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ

丸山　潔・山本雅和　1988『繁田古窯址発掘調査報告書』神戸市教育委員会

三浦圭介　1990「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」『シンポジューム　土器からみた中世社会の成立』

村田晃一　1995「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』36

森　浩一・石部正志・宇田川誠一　1956　「大阪府高石町伽羅橋遺跡調査報告」『古代学研究』15・16合併
森　　隆　1990・91　「西日本の黒色土器生産」『考古学研究』146～148
森　　隆　1992　「平安時代の磁器型窯業生産」『貿易陶磁研究』12
森　　隆　1993　「中世地域社会の形成過程―畿内・畿内周辺地域の事例より―」『古代文化』45-12
安田龍太郎　1983　「絵巻物にみえる器類と考古資料との比較研究序論」『文化財論叢』
山本直人　1994　「絵巻物にみられる漆器の基礎的研究」『石川考古学研究会々誌』37
横田洋三　1981　「出土土師皿編年試案」『平安京左京五条三坊十五町』古代学協会
吉岡康暢　1994A　「食の文化」『岩波講座　日本通史』8，308頁
吉岡康暢　1994B　「中世須恵器の研究」第1部　序論三
吉田恵二　1986　「須恵器以降の窯業生産」『岩波講座　日本考古学』3
吉田章一郎・小野田勝一　1971　『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』
四柳嘉章　1991　「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』34
四柳嘉章　1995　「16世紀の漆器―能登・七尾城跡シッケ地区遺跡出土漆器第2次報告―」『石川考古学研究会々誌』38
四柳嘉章　1995　「漆器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編ほか